



ふる や とし か ざ
古屋俊和さん
AI企業取締役フェロー

人工知能の普及でより良い世界に 様々な企業と協力して AI(人工知能)システムを 開発する

仲間と共に立ち上げたAIベンチャー企業と介護分野のAIベンチャー企業が経営統合して、2017年10月に「株式会社エクサウィザーズ」が誕生。AIを用いた医療診断支援システムなどを手がける、気鋭の技術者です。

「人間らしい」
コンピュータを求めて

— 現在のお仕事内容を教えてください。
古屋 主に3つあり、1つ目は、企業と協力してAIサービスを創出する共同ソリューション開発です。私たちがAIのアルゴリズムを作り、クライアントに売って貰うレベニューシェアモデルで展開しております。2つ目は、AIをさらに手軽に使えるようにするためのプラットフォームの提供を行っています。3つ目は、AIの教育事業で、企業や大学などで講義を行い、データサイエンティスト育成にも力を入れています。

— 共同ソリューション開発の具体例を挙げていただけますか。

古屋 例えば医療分野では、MRIなどの画像から冠動脈をAIに自動抽出させる、医療診断支援システムを開発しました。他にも白血球の一種である好中球の検査値から、抗がん剤投与の量やタイミングをAIに予測させるシステムも開発中です。現在、抗がん剤投与のタイミングは医師の経験によって判断されています。そこでAIに、ベテラン医師の投与に関する判断、つまり好中球の数値と抗がん剤の投与量との組み合わせのデータ

を学習させ、経験の少ない医師に使っていただくのが目的です。医療は、特定の症状には特定の処置が対応しているように、マニュアル化できる仕事が多く、AIとの親和性が高いと感じます。

— AIの研究に進まれた経緯を教えてください。

古屋 中学時代からプログラミングが好きで、高校生になると、コンピュータが想像力を持てば人間のようなコンピュータができるのではないかと考え始めました。そこで進学先として、認知心理学とコンピュータサイエンスの両方を学べる文理融合系の学部を探したところ、まさに同志社大学の文化情報学部が最適だったので。私たちは2期生だったので、1年次から認知科学研究室に特別に入れていただき、脳内で考えていることを目の動きから推論する仮想的描画の研究をさせていただきました。3年次では統計学の研究室に入り、卒業研究では百貨店の協力を得てPOSデータ解析に取り組みました。すると百貨店から、ビジネス現場での有効性に対して疑問の声をいただいた。そこで技術をきちんと社会に役立てるためにはビジネス的視点が必要だと考え、京都大学の経営管理大学院に進学したのです。その後、ディープラーニングという

技術に強い興味を持ちました。例えば猫の画像をコンピュータに大量に読み取らせ、ディープラーニングという技術で学習させると、猫の特徴を勝手に学び、AIの考える、まさに「猫」の画像が作られます。コンピュータが想像力を持つというのは、まさにこれだ。そう考えて、ディープラーニングの研究を進めるために京大の情報学研究所博士課程に進みました。

— その博士課程在学中に、「株式会社エクサウィザーズ」を起業されました。

古屋 ディープラーニングには大量のデータが必要ですが、大学の持つデータは多くありません。一方で企業は、毎日の業務で得られる大量のデータを持っています。そこで企業からデータ提供の協力が得られればディープラーニングの研究もさらに進むと考えて、会社を作ったのです。アカデミックとビジネスをつなぐ、架け橋のような役割の会社です。

人間とAIが協力して
より良い世界を創りたい

— その後は介護事業所も立ち上げておられますね。

古屋 介護事業にもAIはさまざまな形

で寄与できます。ネットショッピングをする際、高齢者にとって複雑なパソコン操作が妨げになることがあります。そこでAIを使えば、画面はもっとシンプルになっていく。例えばアマゾンのAIスピーカー「エコー」では、対話形式で商品の購入ができます。AIによって市場をもっと効率化すれば、高齢者サービスも進化しますし、日本の将来にとっても良いことだと思います。

— 先ほど医療診断支援システムのお話がありました。現在、医療現場でAIは多用されているのですか。

古屋 そうではありません。もしも誤診があれば法的問題として大きく取り上げられてしまう可能性があるし、患者や医師の心理的課題もあるからです。でもAIによる診断の最終責任は、診断支援システムを使う医師にあります。患者が「AIに診断されたくない」と感じる心理的課題も、患者と対面しながら診断を下すのはあくまでも医師であるという姿勢であれば良い。AIが診断を行うことによって自尊心を傷つけられる医師もおられるようですが、これは個々の医師のニーズや好みに応じて学習できる機能をAIに与えることで、その医師にとってより使いやすく、親しみやすいAIになるの

ではと考えています。自分仕様のAIを用いることで、一日に診察できる患者数は倍になるかもしれません。

— 現在のお仕事を、将来どのように発展させたいですか。

古屋 AIが世の中にもっと活用される世界を創っていきたいです。現時点でAIはまだ研究段階なので、いかに実際のビジネスへとつなげていくかが課題です。それをちゃんと形にして、AIがさらに世の中の役に立てればと願っています。また、現在AI関連企業は関西にはほとんどありませんが、優秀なエンジニアは関西にも大勢います。そういう人たちの受け皿にもなりたいですね。同志社大学文化情報学部からも、うちの会社に来てくれれば嬉しいですね。

— 新しい卒業生に向けてメッセージをお願いします。

古屋 私は自分に向いていて、他の人になかなか出来ないことをずっとやってきました。それがたまたまデータ解析やデータサイエンスで、これらを用いてどう社会を良くしていくかを実践してきたつもりです。自分に向いていることを続けつつ、足りない部分を改善していけば、社会に役立つ貴重な人物になれると思います。(2017年11月30日、京都市にて)



かわしま
川嶋かえさん
新聞記者

夜討ち朝駆けで奮闘中 社会を見渡す広い視野で 新しい見方、考え方を 訴える

朝日新聞社に入社して2年目。千葉総局の事件担当記者として、取材に駆け回る多忙な毎日を送っています。記事を通じて「社会に対して新しいもの見方や考え方を伝えたい」、静かに闘志を燃やす新人記者の想いを紹介します。

幅広い関心を
自由な立場で掘り下げたい

——新聞記者を志した動機は何ですか。

川嶋 中学生の頃から漠然と、将来は社会問題に関わる仕事をしたいと考えていました。周囲に母子家庭が少なくなく、貧困問題を見聞きすることがあったからでしょうか。心身に不調をきたした人も身近にいて、それは当事者の属人的な問題ではなく、根底に学校や教育、社会制度の問題があるのでと考える機会もありました。大学に入ってからも、問題を抱えた人たちが生きやすくなるためには社会がどう変わればよいのだろうと考えていました。

——最初から新聞記者志望だったのですか。

川嶋 最初は公務員志望でした。政策過程などを勉強していたので、国の立場から社会や生活を変える仕事をしたいと考えていました。個人が、就活中に考えが変わりました。個人の思想や行動を仕事に反映させたいと考えても、公務員という立場では制約を受けることもあるでしょう。一方で、記者の仕事は個人の裁量に任せられる部分が多いと聞き、その方が私のスタイルに合っていると考えました。

自分の関心の幅が広いことも、記者を志した理由の一つでした。

——入社後は、どんなことから鍛えられるのですか。

川嶋 警察取材や、読者に伝わりやすい記事の書き方などでしょうか。私は現在事件担当なので、いわゆる夜討ち朝駆けの生活リズムを作るのも大変でした。例えば朝6時半に家を出て関係者の家へ行き、最寄りの駅や勤務先まで同行しながら話を聞く。朝回りを終えた後は取材や裁判の傍聴。夜はまた関係者宅を回るなどして、21時以降は警察署に行くことが多いです。帰宅は早ければ23時頃。大きな事件が起きると、現場周辺で「地取り」という聞き込みも行います。

——初対面の人から、取材で話を聞き出すコツは何ですか。

川嶋 元氣よく、そして正直でいることでしょうか。変に構えたり、格好をつけたりしないようにしています。自分をオープンにすることによって、相手の心の扉を開けられていけばいいのですが。

被疑者逮捕後も
事件を追い続ける理由

——取材をされた中で、最も印象深かった

た事件は何ですか。

川嶋 やはり我孫子市の、女児殺害事件です。この事件では被疑者逮捕の瞬間に居合わせました。前日、一人で地取りをしていたところ、地元の方から学校関係者である被疑者の自宅を教えてもらい訪問したのですが、不在。夜の再訪で少しだけ接触できましたが、「答える義務はあのか」と頑なに取材を拒否され、何だか変な人だなと感じました。その後その人物が被疑者らしいと知り、翌朝カメラマンと一緒に張り込んで、逮捕の瞬間を車内から目撃しました。こういう話をすると心配する友人もいます。「一人で何かつて何かあったらどうするの」と。すさまじい瞬間に居合わせたのだなと思えました。

——本当に痛ましい事件でした。

川嶋 事件後も、ご遺族にずっと取材をさせていたと思います。最初は、事件が社会に与えた影響を読者に伝えるのが取材の目的でした。ただ最近思うのは、被疑者が逮捕されれば事件は解決したというの一般的な考え方ですが、そうではないということ。被疑者が黙秘しており、事件の全容は明らかにできていません。ご遺族はまだ深い悲しみから抜け出せず、事件を忘れられないと思

つていらつしやる。まだまだ事件は続いていることを、ご遺族の言葉を通して伝えていけたらと思います。特に今回は、子どもを見守る大人が、見守る対象の子どもを殺めたとされる事件でした。今後の見守り活動のあり方についても、社会で考えていく必要があるでしょう。そのような要素も、記事を通して伝えられたらと思います。

——新聞記者という正義感が原動力というイメージがあります。取材でも、熱い想いに衝き動かされる部分はありますか。

川嶋 取材中は常に必死なので、あまり感情移入はしていません。新しい話をたくさん入手しないと記事にはならない。記事にならないと、その事件の全容や本質、問題点も読者にお伝えすることができません。まずは、そこです。私の場合、正義感や悲しみは後からついてくるのだと思います。

——新聞記者という仕事の面白さを教えてください。

川嶋 自分の興味に沿った取材ができ、自分のやりたいテーマを勉強して、それを読者に伝えられることです。とても贅沢な仕事だと思っています。今後は新しいもの見方や考え方を、社会に対して訴えるような記事を書ければと思っています。

新聞がそういう媒体であってほしいという願ひからの、私の思いです。

川嶋 3年くらいを目処に、将来やりたいテーマを決めることです。今は地域の問題などを自分なりの問題意識や感覚で掘り起こしていきたいと思っていますし、学生時代に学んだ安全保障分野にも興味があります。将来、政治部が社会部に入るのも目標です。

——新しい卒業生に向けてメッセージをお願いします。

川嶋 敬意をもって人に接することでしょうか。私はベテランの捜査関係者と話す機会が多いのですが、敬意を忘れずにいけば、最初は難しそうに思えた方でも打ち解けていただけるようです。それから社会で働くには、いろいろな場所に自分の拠点や、参加できるコミュニティがあると思います。あるいは赴任先で友人をつくる。それができれば、たとえ仕事がかまく行かなくても、失敗ばかりにとらわれて自分のリズムを崩すことは少ないでしょうし、人とのつながりの中で、さらに良い仕事ができるのだと思います。(2017年11月17日、朝日新聞社千葉総局にて)